

『戦後日本ジャーナリズムの思想』

根津朝彦*著、東京大学出版会、2019年

米 倉 律†

私たち日本人は今なお「戦後」を生きている。1956年に当時の『経済白書』が「もはや戦後ではない」と宣言して以来、幾度となく「戦後の終焉」がいわれてきたことは周知のとおりである。そして諸外国と比較して日本の「戦後」は例外的に長いと指摘されることも少なくない（例えば、グラック、2001;橋本、2017）。それでも日本が今なお「戦後」のままであることに疑問の余地はない。本書を通読すると、ジャーナリズムの現場において積み重ねられてきた営為もまた「戦後」という枠組みのなかで展開されてきたということ、従ってその意義や問題点も「戦後」というパースペクティブにおいてこそ適正に理解できるのだということに納得させられる。もちろん、その際の「戦後」とは、終戦＝敗戦とともに始まった新たな時代としての「戦後」であると同時に、ある意味において戦前～戦中から連続的に捉えられるべき「戦後」でもある。

本書は、日本の「戦後」に関する重層的な理解に基づきながら、その中に日本のジャーナリズム史を位置づけて多様な角度から分析し、論じた労作である。本書の第一章は、明治期にルーツを持つ「不偏不党」の形成史の検討に当てられているが、このことは著者の基本的な問題意識をよく表わしているように思われる。著者はまず、日本のジャーナリズムにおける「不偏不党」という理念が「偏らない独立した姿勢を示すものではなく、政府に批判を向けないという商業上のイデオロギー」であることを明らかにする。それは「独立した言論」ではなく、ジャーナリズムの自主規制を正当化し、固定化する役割を担ってきたのであり、日本における言論の自由と自主規制の相剋を象徴する。そしてジャーナリズムが「独立した言論」たろうとすると、必ず権力の側が作動させてきたのが「偏向」攻撃にほかならない。この「偏向」攻撃が実際にどのようなものであったか、そしてジャーナリズムがその前にいかに敗北を続けてきたかについて、第二章「一九六〇年代という報道空間」では詳細に検討されている。こうしてみると、戦前における大阪朝日新聞白虹事件（1918年）と、戦後の風流夢譚事件（1961年）とは40年以上の時間を隔てながら確かに連続的である。そしてそうした戦前からの連続性のうえにおいて、戦後日本のジャーナリズムは撤退戦と敗北戦を続けてきたのだということが了解される。

現在、日本における言論・報道の自由をめぐる状況は厳しい。国際NGO「国境なき記者団」が毎年発表している「報道の自由度」ランキングでは、日本は先進諸国の中で最低レベルの67位（2019

* 立命館大学産業社会学部准教授

† 日本大学法学部教授

yonekura.ritsu@nihon-u.ac.jp

© 立命館大学アジア・日本研究所

『立命館アジア・日本研究学術年報』2020, PRINT ISSN 2435-421X ONLINE ISSN 2435-4228, Vol.1, pp.135-137.

年)である。報道の現場からは、閉塞感や息苦しさを訴える声がしばしば聞えてくる。こうした事態が、必ずしも現政権のもとで生じた一過性のものではなく、戦後のジャーナリズム史のある種の帰結なのではないかという可能性について、現場のジャーナリストも研究者も、本書と共に改めて考えてみる必要があるだろう。

第三章以下では、多様なジャーナリストや思想家が取り上げられていくが、そこにおいても「戦争」「戦後」がキーワードとなっている。例えば、荒瀬豊を対象とした初めてのまとまった研究である第四章「荒瀬豊が果たした戦後のジャーナリズム論」では、ジャーナリズムを「状況に批判的に向き合うことで自由と主体性の獲得を目指す活動であり、現実を変えようとする言論活動」(131頁)と捉えていた荒瀬が、ジャーナリズムはマスメディア／マスコミュニケーションの部分概念ではなく、むしろマスメディア／マスコミュニケーションとのあいだに緊張関係を孕む概念と考えていたことに注目する。そして、そうした荒瀬のジャーナリズム思想の出発点に、戦前期に商業化した新聞が「不偏不党」を掲げながら戦時体制に抗しきれず「一貫性のある言論を放棄」していったという「新聞の戦争責任」に対する鋭い問題意識があったことを明らかにしている。

また、本書を構成する十一の章のなかでも白眉をなす第六章「『戦中派』以降のジャーナリスト群像」においては、戦後日本を代表するジャーナリスト達(大森実、田英夫、原寿雄、新井直之、斉藤茂男、吉永春子、本多勝一など)の活動および彼らのジャーナリズム思想が検討されている。そこでは彼らの多くが1920～30年代生まれであり、1945年の敗戦直後に記者生活をスタートさせていることが焦点化されている。そして彼らが、朝鮮戦争、レッドパージ(1950年)、安保闘争(1959～60年)、沖縄基地問題、ベトナム戦争、さらに従軍慰安婦をはじめとするアジアにおける日本の戦争責任問題などとの濃厚な関わりを通じてキャリア形成していった諸相が分析される。言うまでもなくこれらの出来事は、いずれも「戦争」に起源を有し、「戦後日本」において大きな意味を持ったものばかりである。見方を変えれば、彼ら自身がさまざまな制約を抱えながらも、「戦争」や「戦後」との関係性において、荒瀬豊が言うところの「マスメディア／マスコミュニケーションとのあいだの緊張関係」を孕むジャーナリズムのあり方を体現した存在だったと言えるかもしれない。彼らはまた、同時代の読者・視聴者に固有名で認識されていたジャーナリスト達でもあった。今やごく一部の例外を除いて、そうしたジャーナリストは存在しなくなっている。その彼らが、上述のように「戦争」および「戦後」と深く切り結んでいたことの意味についての、著者の次のような指摘は説得的である。

戦争という国家の暴力性が極大化した状況の体験は、戦後にそれをとらえ返す中で、権力監視と個性的な問題意識を育んでいく。加えて敗戦後に現出した言論の自由を曲りなりにも報道機関が享受したことと相乗して、現実には鋭く対峙する記事を発表できた結果、かれらの仕事が注目されていく。(351頁)

それにしても、「戦後日本」というパースペクティブに立った本書のようなジャーナリズム史研究が、これまで殆んど蓄積されてこなかったことが今更ながら不思議に思われる。今日、メディア史を専門分野とする研究者は少なくないし、映画、広告、ラジオ、雑誌、テレビ、サブカルチャーなどを扱うメディア史研究は近年盛んになっているものの、著者も指摘する通り、「硬派な内容を追うジャーナリズム史は研究者が圧倒的に」少なく、戦後日本の「言論・報道やその思想性を主対象と

するジャーナリズム史」のまとまった研究成果としては本書がほぼ唯一である。

歴史学者の成田龍一は、戦後の日本人を戦争との関連において三つの世代に分類している。戦争経験者（A）と、親の戦争体験を一次情報として聞かされた「戦後第一世代」（B）、学校教育やメディアを通して再編された戦争しか知らない「戦後第二世代」（C）である（成田, 2015）。成田のこの整理に従えば、戦後日本のジャーナリズムにおけるキーマンとして知られるジャーナリストの多くは、（A）と（B）に該当する。そして現在、ジャーナリズムの第一線で活動しているジャーナリスト達は、戦後第二世代（C）、あるいは更にその子の世代に当たる人達である。戦後70年の節目の年にあつた2015年に、戦後生まれ世代の割合が人口の8割を超え、逆に敗戦時に10歳以上だった人の割合は8%以下になったことが話題となったが、時間の経過とともに今後ますます「戦争」は遠くなっていく。そして「戦後」が仮に枠組みとしては維持されたとしても、「戦争」や「戦後」に人々はますますリアリティを感じにくくなっていくだろう。必然的に、現場のジャーナリスト達と「戦争」「戦後」の関係性も、変容せざるを得ないし、その結果、ジャーナリズムのあり方自体も次第に変わっていくだろう。そう考えると、「戦後」についての複層的な理解のうえに立って戦後日本ジャーナリズムの活動および思想の歴史的展開を跡づけた本書の意義は極めて大きい。

本書のようなジャーナリズム史研究は、（著者も意図している通り）現場と研究の世界を架橋する役割を果たし得る。現場のジャーナリストは、本書に記述された「戦後日本」という枠組みとその中でジャーナリズム史の延長上に自らを位置づけることによって、自身の仕事の意味や可能性、課題等を再確認することができるはずだ。また同時に、著者がジャーナリズム文化の発展にとって大学が果たす役割に言及していることにも注目したい。大学は、ジャーナリズム教育を通じて現場で働く人材を送り出すという重要な機能を持つ。実際、本書「あとがき」によれば、著者のゼミナールはマスメディア（新聞社、テレビ局、テレビ番組制作会社、ラジオ局）の現場で働く人材をすでに多数輩出しているという。他方で、もちろん大学の役割はそうした人材育成にとどまらない。著者も言うとおりに、「ジャーナリズムを支えるのは最終的に読者（視聴者）」である。大学は読者（視聴者）の育成やすそ野の拡大にも深くコミットしている。

本書が、研究者はもとより、ジャーナリズム、メディアの現場で働く人々、報道の仕事に関心を持つ学生、そしてジャーナリズムに直接関わるわけではないが読者（視聴者）としてジャーナリズム文化を支える幅広い人々に読まれることを通じて、日本のジャーナリズム文化が再活性化されることを期待したい。

参考文献

- グラック, キャロル (2001) 「現在のなかの過去」アンドルー・ゴードン編『歴史としての戦後日本 上』中村政則監訳, みすず書房.
- 成田龍一 (2015) 『戦後史入門』河出文庫.
- 橋本明子 (2017) 『日本の長い戦後——敗戦の記憶・トラウマはどう語り継がれているか』山岡由美訳, みすず書房.